

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00415

研究課題名(和文) 近現代英語圏における「二つの文化」論争の系譜をたどる

研究課題名(英文) Genealogy of Two Culture Controversies

研究代表者

山田 雄三 (Yamada, Yuzo)

大阪大学・大学院人文学研究科(人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻)・教授

研究者番号：10273715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：「ふたつの文化」の諸相のうち、その中心となるのは「田舎」と「都会」との分断もしくは交流のあり方である。本研究ではこの問題を考察するにあたり、20世紀初頭に注目されはじめたルポルタージュという文学の新しい形式とドキュメンタリーという映像ジャンルに示された試みに着目した。研究論文として公表したおもな成果は、徳永直による満州ルポルタージュ、英国アーツ・カウンシルによる「田舎」と「都会」の文化政策、テクノロジー使用をめぐるマーシャル・マクルーハンのグローバル発想とウィリアムズのコミュニティ重視である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「ふたつの文化」論争に密接に関わる問題として、20世紀のテクノロジーと人間の関わり方がある。Snowの系譜に、Global Villageの可能性を唱えたMarshall McLuhanを、Leavisの系譜にCultural Studies創始者のRaymond Williamsを置き、両者を比較した。その際に、Williamsの著書Television: Technology and Cultural Formを翻訳出版するとともに、その意義について考察した。またテクノロジー開発が国家的事業になるなかで、英国のArts Councilが制度化していくプロセスを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The main concern of this study is the relationship between "country" and "city" in the light of cultural practices. I have been focusing and researching on the following topics: a series of reportage by Tokunaga Sunao in Manchuria, the cultural policy of the British Arts Council after WW2, two fractions of the Scrutiny School (Marshall McLuhan and Raymond Williams), etc.

研究分野：英語圏文学、カルチュラル・スタディーズ

キーワード：Two Cultures Media Technology Raymond Williams Arts Council

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

F. R. Leavis と C. P. Snow とのあいだに「ふたつの文化」論争が起きた 1950 年代末は、同時に冷戦構造が確立し、東西両陣営で原子力やロケットなどのテクノロジー開発が推進された時期と重なる。こうした時代を背景として、文系と理系 成人労働者教育と生涯教育、消費文化とポピュラー・アート、テクノロジー決定論とテクノロジー使用論の分断が顕著となる。これは 19 世紀半ばに始まる普通教育をととしたナショナリズム醸成と 20 世紀の国際化との葛藤のなかで生じたのではないかという着想を、19 世紀半ばからの文化概念の変遷をたどるうちに得た。

### 2. 研究の目的

本研究は 19 世紀なかばから現代まで英語圏でさまざまなかたちをとって起きた各「ふたつの文化論争」の論点を明らかにするとともに、その系譜を歴史的にあとづける試みである。19 世紀なかばに Matthew Arnold が *Culture and Anarchy* (1869) を著し、価値を帯びた文化観の普及に努めて以来、価値付けから外れた文物や慣習に価値を再発見する反応および活動は、たえず生まれてきた。本研究では、このような反応や活動を「もうひとつの文化」普及活動とみなし、支配的な文化との論争が、時と場所を変えて 20 世紀末までふたつの文化論争の形態をとってきたことを広汎な資料調査をもとに明らかにする。ひいては、このふたつの文化論争の歴史的な変化のなかに、近代の成熟および衰微を探りたい。

### 3. 研究の方法

本研究代表者は、2010 年度より大英図書館、ケンブリッジ大学図書館及びスウォンジー大学図書館レイモンド・ウィリアムズ・アーカイヴを定期的に訪れて、資料の調査および有識者からの情報収集を継続して行ってきた。上述の研究機関での資料調査を継続するとともに、ウェールズに点在する炭坑者図書館 (Miners' libraries) や水俣病資料館ならびに水俣学の資料を収めた熊本学園大学などを訪れて、新たな資料収集を試みたい。また、1960 年代のポピュラー・アートを調査する上で、映像資料の閲覧、分析が必須となる。英国映画協会 (BFI) にも定期的に訪れて、映像資料の解析に努める。

### 4. 研究成果

「ふたつの文化」の諸相のうち、その中心となるのは「田舎」と「都会」との分断もしくは交流のあり方である。本研究ではこの問題を考察するにあたり、20 世紀 初頭に注目されはじめたルポルタージュという文学の新しい形式とドキュメンタリーという映像ジャンルに示された試みに着目した。研究の具体的概要は以下のとおりである。1930 年代にルポルタージュの文体が世界中で注目されはじめたとき、いまだ知られざる労働者階級の日常をルポしようとした作家が東西にいる。George Orwell と徳永直である。両者には帝国主義を実地で観察するという共通の経験があった。オーウェルについていえば、彼は 1922 年から 27 年にかけて治安警察官としてビルマに生活し、支配者と被支配者双方の眼差しを獲得している。この眼差しの獲得が、彼の描くルポルタージュに決定的な特徴を与えた。他方、徳永は京浜工業地帯や長野の農村でのルポルタージュ執筆で一定の評価を得たあと、意気揚々と満州国に赴き、満州の人びとを報告している。ところが彼にとって、この実地でのルポルタージュの試みは惨憺たる結果に終わる。それは同時に、当時の日本におけるルポルタージュ形式の限界を指し示すことにもなった。

「ふたつの文化」論争に密接に関わる問題として、20 世紀のテクノロジーと人間の関わり方がある。Snow の系譜に、Global Village の可能性を唱えた Marshall McLuhan を、Leavis の系譜に Cultural Studies 創始者の Raymond Williams を置き、両者を比較した。その際に、Williams の著書 *Television: Technology and Cultural Form* (1974) は決定的に重要な図書と考え、翻訳出版するとともに、その意義について考察した。また第二次戦後にテクノロジー開発が国家的事業になるにつれ、社会において芸術が果たす役割についても議論され始める。こうした歴史的背景において英国の「アート評議会 (Arts Council)」が制度化していくプロセスを明らかにした。

最後に、「ふたつの文化」を架橋する試みについてのケース・スタディーズを行った。20 世紀後半のウェールズを代表する小説家 Alun Richards による「ふたつの文化」を架橋しようとする試みを分析した。Richards は 1980 年代に国際交流基金の招きで来日し、日本を取り巻く海の物語を書こうと試み、挫折した。著者はその失敗の原因を、英国のサッチャー主義と日本の経済発展の潮流のなか、Richards が連帯していた炭鉱コミュニティの崩壊と日本の炭鉱や漁村コミュニティへのアクセスの失敗にみとめる。Richards の日本での活動を論じた研究は過去に例がなく、これを研究対象としたことは海外でも評価された。また 1930 年代のウェールズ小説の語り手の問題も論じている。1920 年代、イングランドを中心にモダニズム運動が起こるが、こ

れは語り手の不安定性と語り の不確実性を強く意識したものであった。そのなかから「意識の流れ」の手法および Virginia Woolf の *The Waves* (1931) に典型的な複数の語り手が作り出されていく。対照的に、ウェールズにあっては、語り手は共同体から突出することができず、聞き手の存在がアクチュアルに感じられる状況で語るため、一人称複数の語り手の導入といった実験が試みられている。同時期のイングランドを中心とした物語手法とウェールズの手法との相違を明らかにし、1930年代の英国においてイングランド(都会)とウェールズ(田舎)という「ふたつの文化」が形成されるプロセスを知る手がかりを得た。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山田雄三	4. 巻 8(61)
2. 論文標題 歴史のなかに “something” を求めて 1980年代の歴史主義をふりかえる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Shakespeare Journal	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山田雄三	4. 巻 7
2. 論文標題 アーツカウンシルの挑戦 田舎と都会の文化政策	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知人文社会科学研究	6. 最初と最後の頁 11-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田雄三	4. 巻 15
2. 論文標題 杖持つ語り部、「悶ゆる」語り部	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 木綿葉	6. 最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yuzo Yamada	4. 巻 6
2. 論文標題 Lost in Alignment: Alun Richards in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal of Welsh Writing in English	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.16995/wwe.372	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田雄三	4. 巻 14
2. 論文標題 語り手という登場人物	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 木綿葉	6. 最初と最後の頁 50-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuzo Yamada	4. 巻 13
2. 論文標題 The Unreliable Representation of the Subaltern: The Case Study of Tokunaga Sunao 's Reportage	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Post-Colonial Formations	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 山田雄三	4. 巻 13
2. 論文標題 評論「ルポルタージュの語り手 比較文学的徳永直論」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 木綿葉	6. 最初と最後の頁 88-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山田雄三
2. 発表標題 コメンタリー「2020年「から」考える 研究 / 教育の過去・現在・未来」
3. 学会等名 第21回国家と法研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田雄三
2. 発表標題 コメンタリー「レイモンド・ウィリアムズ著『テレビジョン』（木村茂雄・山田雄三訳）」
3. 学会等名 レイモンド・ウィリアムズ研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田雄三
2. 発表標題 リフレインのドラマトゥルギー パラッドの流通と受容をめぐる
3. 学会等名 関西シェイクスピア研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuzo Yamada
2. 発表標題 A Commentary on Tokotoko Tales
3. 学会等名 Tokotoko Tales: A Poetically Indigenous Environmentalism (Lecture Series by Selina Tusitala Marsh)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田雄三
2. 発表標題 アーツ・カウンシルの挑戦 田舎と都会の文化政策
3. 学会等名 高知人文社会科学会第7回公開シンポジウム「アート・ポリティクス 地域社会におけるアート実践と文化行政の「ほどよい距離」とは？」(招待講演)
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 伊藤守編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 400
3. 書名 メディア論の冒険者たち	

1. 著者名 玉井暉, 末廣幹, 岩田美喜, 向井秀忠編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 音羽書房鶴見書店	5. 総ページ数 280
3. 書名 コメディ・オヴ・マナーズの系譜 王政復古期から現代イギリス文学まで	

1. 著者名 河野真太郎, 中井亜佐子, 川端康雄, 山田雄三, 西亮太(訳)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 堀之内出版	5. 総ページ数 243
3. 書名 暗い世界ーウェールズ短編集	

1. 著者名 木村茂雄, 山田雄三(訳)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 268
3. 書名 レイモンド・ウィリアムズ著テレビジョンーテクノロジーと文化の形成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------